

萬福寺だより

第48号

追善供養御詠歌（妙鐘）

うちならず鐘のひびきはそのままに

三世の仏のみ声なるらん

法恩供養御詠歌（澄心）

消えてゆくかねのひびきに聞き入れれば

いつか澄くるわが心かな

作詞：赤松月船 作曲：安田博道

仏教寺院には鐘がつきものです。未だ時計の無い（大らかな）時代、人々は朝の鐘を聞いて目を覚まし、暮れの鐘を聞いて家路に就きました。

「夕焼け小焼け」の歌にも「山のお寺の鐘が鳴る」と歌われた日本の原風景の一つと言えるでしょう。鐘と言えば、年末年始のこの時期に皆様が思い浮かべるのは大晦日の除夜の鐘でしょうか。参拝者が鐘楼前に列を作り、百八つの鐘の音で煩惱と汚れを祓う恒例の光景も、昨今では中々見かけなくなつて参りました。当山萬福寺では、先代賢道和尚の意向により、境内に梵鐘がありません。子供の頃は、境内に梵鐘がありました。近年住宅地内の寺院で鐘の音が「騒音問題」等とワイドショーで取り上げられたり、一部の観光客等に

ガンガンと遊び半分で乱打されている様子を見るに、賢道和尚には先見の明があったと言えるでしょう（当たって嬉しい事ではありませんが）

除夜の鐘と言えば、大晦日にテレビ放映される永平寺の大梵鐘が有名です。とても大きな鐘で、良い音色で響かせる為には躊躇を捨てて全身で思い切り撞く事が必要である事は以前の寺報で紹介させて頂きました。夏には法堂横の承陽殿前に有る承陽鐘と言う鐘が毎夜百八回鳴らされます。（大梵鐘と比べれば）



小振りな鐘ですが、伽藍に響くコーンと言う音は耳と心に優しく響き、修行中は励まされ鐘を撞く役目を楽しみにしていた事をよく覚えております。この様な梵鐘以外にも、法要の開始を告げる殿鐘、坐禅の始まりを知らせる止鐘等寺院の中には鐘の音が満ちており、未だに鐘の音を聞く度に心が引き締まり背筋の伸びる思いが致します。

我々僧侶が梵鐘を撞く時には「仏さまの声を聴くように心して撞く」と言う事を教えられます。そし

てひと撞き毎に礼拝して

「三途八難 息苦停酸 法界衆生 聞声悟道」

（どのような苦境に有る人も、様々な苦しみから逃れる事ができ、あらゆる命がこの鐘の声を聞いて、悟りを得る事ができるように）とお祈りをお唱えします。上の写真に写っている萬福寺観音様前の鐘の台座にも、

「願わくはこの功德をもって普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん事を」静かに一度だけ鳴らし 右の偈文をお唱えしましょう」と刻まれています。お参りの際は心を込めて静かに一回鐘を撞き、右の偈文をお唱え下さい。

鐘の音とは祈りの声に他ならず、余韻を伴って虚空に溶けていく鐘の音は、三世へ過去現在未来と移りゆく時代の中で語られてきた諸仏の説法（妙音）であり、聞く者を仏教の教えに目覚めさせる働きがあるともされています。鐘を撞く人、鐘の音を聞く人、それぞれが鐘の音に集中する事で、心が少しづつ穏やかになり、煩惱のさざ波が鎮まり、心の水が澄み渡っていく。その様な情景がこの御詠歌には詠われているのです。

流石に皆様のご自宅で梵鐘を、と言う訳には行きませんが、お仏壇の前に座りおりんを鳴らす時は姿勢を正しおりんを静かに鳴らし、心を込めてお祈りしましょう。その祈りの声と姿は過去の仏様達だけでは無く、未来の仏様の教えを守り伝える人達に繋がって行く筈です。そうやって過去からの授かり物を現代の私達が未来に伝えてゆく事こそが、何よりの追善供養であり法恩供養になるのではないのでしょうか？

垣内弘道（聖山）

◇ 通般若帳 ◇

昨年までの『編集後記』のコーナーですが、住職より以前から「ネーミングセンスが悪い」と駄目出しをされていた為、無

い知恵を絞って命名してみました。名前の由来は「大般若経」の一節「無位の真人、面門に現ず、智慧愚痴、般若に通ず、靈光分明にして大千に輝く、鬼神いずれの所に手脚を着けん」の「般若に通ず」より。この一節は大般若経の経本をバラバラと流し読む「転読」の際に唱えられる偈文でもあります。この偈文は道元禪師が痘瘡(天然痘) 除けの偈文として使われた事もあるそうなので、コロナ禍の現代にも即した命名であると自負しております。

さて、そのコロナ禍のおおりに受けて練習を自粛していた萬福寺梅花講ですが、この三年間の間に新規入会者を二人お迎えする事が出来ました。東京都内の梅花講で会員数を増やしている講は中々無いそうなので嬉しいお知らせです。先日、講員さんの御紹介で見学者の方がいらっしやいました。お話を伺うと、たまたまテレビの旅番組で御詠歌をお唱えしている場面が映り、ご自分の御祖母様が同じお稽古をしていた事を思い出して見学いらっしやったそ

うです。ご自宅が遠い事と、今はお忙しいとの事で入会は又の機会にとの事でしたが、ご縁があれば来年にも新規の会員さんがふえるかもしれません。曹洞宗梅花流詠賛歌の成立は昭和二十七年と比較的最近ですが、仏様の教えを歌でお唱えする事自体の歴史は古く、インドの古語サンスクリットで歌われた梵讃、中国語で歌われた漢讃、霊場の巡礼時に詠まれた和歌に巡礼者達が節を付けて歌った和讃などが御詠歌の源流ともされています。お寺に集まり大勢でお唱えする御詠歌は、檀信徒の交流の場として多くの方に親しまれてきたようです。十数年前までは、全国各地で開かれる奉詠大会に多くの方が参加され、大変な賑わいぶりでした。そんな梅花流詠賛歌ですが、近年では講員さん達の高齢化、コロナ禍による稽古・発表の場の減少・中止により全国的に講員さん達が激減し、消滅の危機にあります。一度断絶した文化を再興する事は容易な事ではありません。ですが、僅かでもご縁があれば、繋がりと

梅花流詠賛歌を未来に繋げる為、仏の祈りを次代に継承する為、萬福寺梅花講では御参加をいつでも歓迎致しております。(弘道)

月例行事のご案内

- ◇坐禅会◇
- 第二土曜日午後五時半より
- ◇お写経会◇
- 第四土曜日午後一時より随時
- ◇御詠歌会◇
- 第二火曜日午前十時より
- ◇ヨーガ教室◇
- 毎週木曜日 午前九時半より
- ◇遊書の会◇
- 第一・第三水曜日午前十時より

◇ 感謝録 ◇

水屋しめ縄奉納
為木村家先祖代々菩提
施主 木村重直 殿

お大師さま頭巾・前掛け奉納
施主 檀信徒有志の皆様

仏具料

為聖光院徳芳清富大師
為精勤院寿翁徹正居士
為清廉院寿徳妙道大姉
為秋月清操信女
施主 伊藤正治 殿

本堂・山門外壁工事志
施主 石亀久芳 殿

和尚の独り言

☆昨年はロシアによるウクライナ侵攻という、想像だにしなかった侵略戦争に驚きを隠せませんでした。しかし、よくよく考えれば八年前にロシアはクリミアに侵攻していたわけですから、私達の考えが甘かったと言えはそれまでです。クリミア侵攻の時は遠いよその国の出来事としか考えなかつた私達が、正に平和ぼけであつたのでしょうか。日本を含めて西側諸国の報道も、地域の民族紛争ぐらいにししか伝えていながつたことも影響しているでしょう。

☆お釈迦様のお生まれになつたカピラ国は、常に隣の大国コーサラ国の脅威にさらされてきました。コーサラ国の瑠璃王は進軍の途中でお釈迦様と出会つたならば兵を引き上げると命令されてきました。そこでお釈迦様はコーサラ国が攻めてくると坐禅をして三度侵略を止めさせました。しかし四度目の時には坐禅で抗議することなく、釈迦族は滅ぼされてしまつたそうです。蛇足ではありますが「仏の顔も三度まで」は、ここから来ているとも言われています。人類の歴史は有史以来、戦争の歴史です。その度に数え切れない人々の命が失われてきました。その度に平和が唱えられてきました。しかし又同じ事の繰り返しです。なんと愚かなことでしょうか。「法句経」に「まこと、怒みごころは、いかなるすべでもつとも怒みをいなくその日まで、この地上にはやみがたし。ただ怒みなきによりてこそ、この怒みはやむこれ易(かわ)りなき真理なり」と示されています。深く味わいたいものです。

☆ウクライナでは今日も罪も無い多くの市民が犠牲になっています。いつの戦争も犠牲になるのは一般市民です。極寒の地でライフラインを狙つた爆撃は、実に非人道的な行為です。遠く離れた日本から私達に出来ることは、避難を余儀なくされているウクライナの人々を物心共に支援することぐらいしか出来ません。



そして一日も早くこの戦争が終わることを祈ることしか出来ません。

「萬福寺だより」第四十八号
発行 令和五年一月五日
発行所 聖閣山 萬福寺
発行人 垣内 善勝
東京都葛飾区柴又六の十七の二十
電話 三三五七-四五八八
FAX 三六五七-八五六三

◇ 編集後記 ◇

『親の説教と冷酒は後から効く』
という言葉があります。

お酒を嗜まない方に後者の喩えは理解しにくいかもしれませんが「耳や頭の痛みと共に叩き込まれた経験は薄れる事無く記憶に残り、理解できる状況に自分が立つて始めてその有り難みが理解できる」「受け入れやすい意見ばかり飲んでいると後で後悔する羽目になる」そんな意味合いの言葉だと



(上) 萬福寺境内・お大師さま
有志の皆様にご参り頂いた前掛けと
紅葉の紅が緑に映える

が、常に心の片隅に刻んでおけば、邪心が心に忍び込んだ時にワクチンの働きをしてくれる事でしょう。コロナ禍の現在、お寺にお参りされる方もコロナ以前に比べれば少なくともなっていました。もう少しコロナが落ち着いてから「心のワクチンの定期接種」として参拝頂ければ幸いです。(彼岸会・施食会・盂蘭盆会等では、本堂外からの御焼香もできるように準備してあります)

思います。昨年コロナワクチンを打った後の痛みを感じながら、その様な事を思いました。
ワクチンの仕組みとは、体内の免疫に排除すべき病原菌を記憶させ、免疫機構が効率よく動ける環境を作る事で、人によっては「防犯訓練」に例える事もあるそうです。お釈迦様の教えの根本は諸悪莫作衆善奉行・人の悲しむ悪い事をしてはいけません、人に喜ばれる良い行いをしましょう、ということです。簡単に見える教えです

この一年で、住職は二回の心臓手術を行いました。きっかけは住職の息切れに気付いた母の「お医者さんに行った方が良くない？」と言う一言でした。住職は「歳の所為だろう」と言っておりました。が、検査の結果は心房細動というものでした。仏道の第一歩は「苦諦」苦しみの自覚にあります。コロナ禍で人と人との繋がりが希薄になって今だからこそ、身近な人への思いやりと気遣いを大切にしたいものです。

子供の頃大人から叱られた事の意味を大人になって始めて気が付くように、お釈迦様の教えも見聞きしたその時には実感が湧かなくても、ある時突然に自分の実感として悟れる一瞬が訪れます。年一回、紙面を借りてお話ししている内容が人生のワクチンとなる事を祈り、今年こそコロナ禍が終息する事を願って新年の御挨拶に代えさせていただきます。(弘道)

月例行事のご案内

- ◇坐禅会◇
- 第二土曜日午後五時半より
- ◇お写経会◇
- 第四土曜日午後四時より
- ◇御詠歌会◇
- 第二火曜日午前十時より
- ◇ヨーガ教室◇
- 毎週木曜日 午前九時半より
- ◇遊書の会◇
- 第一・第三水曜日午前十時より

◇感謝録◇

- 水屋しめ縄奉納
為木村家先祖代々菩提
施主 木村重直 殿
- お大師さま頭巾・前掛け奉納
施主 檀信徒有志の皆様
- 仏具料
為精勤院寿翁徹正居士
為清廉院寿徳妙道大姉
為秋月清操信女
施主 伊藤正治 殿

和尚の独り言

☆「和尚の独り言」の文字を大きくしました。平成五年の創刊時は和尚も三十代、チョット気恥ずかしさも文字は小さくしました。時を経て七十を過ぎると少し凶々しさが増したことも多分にあると思いますが、何より自分で自分の書いた文章が全く見えないのです。
☆さて、この二年ほど世界は新型コロナウイルスの影響で、私達の生活環境は一変しました。当初、宗教施設でのクラスター発生が多く、当山でも「施食会」法要を中止したりもしました。昨年後半からは感染防止の方法も確立され、徐々に行事も復活し始めました。とはいえ完全復活には程遠く、早く以前の日常が取り戻せる日を望むばかりです。

社会経済活動の復活が喫緊の課題ではありますが、寺院に於けるコロナの影響について全日本仏教会や曹洞宗でも調査が実施されデータが公表されました。それによると昨年一年間で中止または延期された行事は七五パーセント、御法事の中止や延期も半数に上り収入は三割減だそうです。当山のデータも概ね同様です。これらの数字は社会一般の経済活動も同様のデータが出されておりますので、お寺も世の中の社会活動と連動していることを改めて感じさせられました。
☆コロナ禍によってもたらされた日常生活の変化の中、今後元に戻ることなく受け入れていかざるを得ない生活様式もあるでしょう。ウィズコロナ、アフターコロナと喚ばれる新しい生活様式と向き合って行かざるを得ません。そのような環境下、私達が自分を見失わずに生きていくには何が大切なのでしょうか？私は次の三点だと思えます。(一)人と人のつながりを大切にすること (二)利他の心を持つこと(慈愛を持つて人に喜ばれることをする) (三)過去にとらわれず、未来に多くを望むことなく「只」今を生き抜くだけではないでしょうか。
今を正念場とし、逃げず追わず、ドツシリと腰を据えて生きていきたいものです。
青山俊董老師からご寄贈頂いた本に「私の人生を創ってゆく主人公は私でしかない」と揮毫いただきました。
この言葉を皆さまにもお送りしたいと思います。



「萬福寺だより」第四十七号
発行 令和四年一月五日
発行所 聖閣山 萬福寺
発行人 垣内 善勝
東京都葛飾区柴又六の十七の二十
電話 三六五七一四五八八
FAX 三六五七一八五六三